

役員

役員




所属・職位	学長	
氏名	北野 正剛 (Kitano Seigo)	
取得学位	医学博士、九州大学、1981年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	消化器外科学
研究キーワード	腹腔鏡下手術、内視鏡外科、胃癌、大腸癌、消化器内視鏡、抗がん剤脱毛、化粧療法
研究内容	<p>●進行大腸癌に対する腹腔鏡下手術の有用性に関する臨床試験</p> <p>進行大腸癌に対する腹腔鏡下手術と開腹手術の手術成績を比較した多施設共同無作為比較試験にて腹腔鏡下手術が標準治療である開腹手術と治療成績が同等であり、腹腔鏡下手術が低侵襲かつ良好な治療成績であることを明らかにした。本臨床試験結果により、大腸癌治療ガイドラインでは進行大腸癌に対する腹腔鏡下手術が標準治療として記載されることとなった（論文1）。</p> <p>●世界初の腹腔鏡下幽門側胃切除術の開発</p> <p>1991年に世界で初めての腹腔鏡下幽門側胃切除術を行い、その成績を発表した。またその後は胃癌に対する腹腔鏡下手術の指導的立場として様々な臨床試験をおこなった（論文2）。</p> <p>●わが国への内視鏡的肥満治療および外科的肥満治療の導入</p> <p>大分大学で本邦初の内視鏡的胃内バルーン留置術を行った後、肥満治療に外科的治療を導入するなど、本邦の肥満外科治療の指導者として数々の報告を行った（論文3）。</p> <p>また、日本消化器外科学会ならびに日本内視鏡外科学会の理事長・名誉理事長として本邦の肥満外科治療の現状について報告した。</p> <p>●我が国への新たな治療法の導入（食道静脈瘤硬化療法と内視鏡外科）</p> <p>食道静脈瘤硬化療法の開発；食道静脈瘤に対する手術療法は死亡率も高く予後不良であったことからケーブタウン大学留学を契機に新たな硬化療法の開発に邁進した。現在内視鏡的治療が標準治療となった（論文4）。</p> <p>内視鏡外科の開発；偉大な外科医は大きな切開を行うという概念を覆す外科の大きな変革に関わった。日本における導入から国際展開までこれまでの発展を紹介した（論文5）。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●研究業績</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Kitano S, et al. Survival outcomes following laparoscopic versus open D3 dissection for stage II or III colon cancer (JCOG0404); a phase 3, randomised controlled trial. Lancet Gastroenterol Hepatol 2(4); 261-268, 2017 2. Kitano S, et al. Laparoscopy-assisted Billroth I gastrectomy. Surg Laparosc Endosc 4(2); 146-148, 1994 3. 北野正剛. 食道静脈瘤硬化療法の黎明期, 消化器外科 21(2):143-151, 1998 4. 北野正剛. 内視鏡外科の黎明期から現在に至るまでの苦勞, 消化器外科 41(13):1733-1745, 2018 <p>●アピールポイント</p> <p>1990年、西日本で最初に腹腔鏡下胆嚢摘出を開始し我が国初の内視鏡外科トレーニングコースを開催するとともに、1991年には世界初の腹腔鏡による胃がん切除術を施行し、その後現在に至るまで多くの教育活動に従事している(国内受講者約6,500名)。アジアを中心にAPSDE(The Asian Pacific Society for Digestive Endoscopy-メンバー：24か国の専門学会)とMESDA(Mekong Endo-Surgery Development Association)の会長として多くの教育プログラムと実地訓練を現地で開催している(受講者約2,500名)。最近では抗がん剤の副作用による容姿の変化に悩む患者さんの社会活動支援のための内閣府認定公益社団法人等の理事長として大手企業と協働し化粧療法の開発や普及に努めている。</p>

所属・職位	総括理事・理事(企画・戦略, 医療・病院担当)、副学長、医学部医学科整形外科学講座・教授	
氏名	津村 弘 (Tsumura Hiroshi)	
取得学位	博士(医学)、九州大学、1998年5月	
SDGs目標		

研究分野	関節外科学、バイオメカニクス	
研究キーワード	人工関節学、膝関節、股関節、計算力学	
研究内容	<p>●コンピュータを用いた力学解析手法として、有限要素解析 (Finite Element Analysis: FEA) が知られているが、岩盤解析用に開発された剛体ばねモデル (Rigid Body Spring Method: RBSM) は牽引力に抵抗しない関節の力学解析に適したモデルであり、これを用いた関節の接触圧分布の解析を行っている。2次元での膝関節周辺骨切り術や3次元での股関節周辺骨切り術の手術シミュレーションプログラムは、力学解析も行えるものとして開発した。特に膝関節周辺骨切り術は、固定デバイスの発達により術式も変更され、症例数の著しく増加していることから、シミュレーションプログラムもバージョンアップを行っている。</p> <p>●人工膝関節置換術は、日本で年間10万例程度行われている手術であり、疼痛・歩行能力の改善は著しいが、屈曲角度が正常に比べて十分でない症例があり、これを改善する手術法の研究を行ってきた。術後屈曲角度は患者満足度とも強く関連することが報告されている。関節後方のクリアランスを高めるとともに、内外側の軟部組織バランスを適切に調整する必要があり、そのためのデバイスの作成や手術手技、臨床成績について検討している。またFEAを用いた内側側副靭帯に対するパイクラスティングの力学解析なども行っている。</p> <p>●NEDOや帝人ナカシマメディカルとともに、アジア人向けの新型人工膝関節の開発にも携わっている。膝関節のサイズやプロポーションは人種差があることが知られている。日本人やタイ人などで、膝関節の形態を、CTを用いて詳細に測定し、アジア人に適した形態とサイズバリエーションを持った新規人工膝関節 (Future Knee[®]) が完成した。2017年より使用開始し、2021年末には全国で千例以上の手術が行われた。サイズマッチングや屈曲可動域は良好で、よい臨床成績が期待されている。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>1 Tsumura H, Kaku N, Ikeda S, Torisu T. A computer simulation of rotational acetabular osteotomy for dysplastic hip joint: does the optimal transposition of the acetabular fragment exist? J Orthop Sci. 2005;10(2):145-51.</p> <p>2 Sawatari T, Tsumura H, Iesaka K, Furushiro Y, Torisu T. Three-dimensional finite element analysis of unicompartmental knee arthroplasty--the influence of tibial component inclination. J Orthop Res. 2005 May;23(3):549-54.</p> <p>3 松田 昌悟, 平川 雅士, 長嶋 優, 池田 真一, 津村 弘. TKA術中の屈曲伸展ギャップ差が患者立脚型評価に与える影響. 整形外科と災害外科 (0037-1033)70巻4号 Page618-622(2021.09)</p> <p>アピールポイント：骨切りシミュレータやRBSMのプログラムは、DICOMファイルの読み込みから解析、3Dグラフィックスでの出力に至るまで、C++による自作でありWindows上で稼働する。このため、目的に応じて修正を行いながら研究を行っている。</p>	

役員

所属・職位	理事（教育，入試，学生・留学生支援担当）	
氏名	藤井 弘也（Fujii Hironari）	
取得学位	博士（理学）、九州大学、1992年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	物理学（物性物理），物理教育，情報教育
研究キーワード	放射線分析，ICT活用，情報通信
研究内容	<p>●誘電性結晶の構造相転移に関する研究 主にペロブスカイト型結晶構造を持つ誘電体，磁性体の構造相転移を主にX線回折や中性子線回折を使って調べる（論文1.）。</p> <p>●理科教育（特に物理教育）に関する教材開発 物理実験装置のインターネット経由での遠隔制御（論文2.）。理科教育におけるICT活用に関する研究（論文3.）。</p> <p>●情報教育，特に情報通信やプログラミングによるアプリケーション開発 インターネット経由での装置遠隔制御法の研究（論文2.）。プログラミングによる教材開発（論文3.）。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2002年，Magnetic Properties of Layer Compounds $RbVF_4$ and $Cs_{0.5}Rb_{0.5}VF_4$. J.Phys. Soc.Jpn.(Japan) Vol.70, Suppl. A. pp.103-110 2013年，固体の融点遠隔実験装置の開発，大分大学教育福祉科学部研究紀要 第35巻第1号 pp.47-56 2019年，アクティブラーニングを取り入れた理科指導法の研究-ICT活用授業実践の取り組み-，大分大学教育学部研究紀要第41巻第1号pp.43-55

所属・職位	理事(研究, 社会連携, 産学連携担当)、副学長、医学部医学科環境・予防医学講座・教授	
氏名	山岡 吉生 (Yamaoka Yoshio)	
取得学位	博士(医学)、京都府立医科大学、1997年3月	
SDGs目標	     	

研究分野	消化管感染症、分子疫学
研究キーワード	ヘリコバクター・ピロリ(ピロリ菌)、胃癌、消化器内視鏡、国際共同研究

研究内容	<p>研究内容は(A)ピロリ菌が疾患や薬剤耐性を惹起するメカニズムに関する研究、(B)ピロリ菌を用いた人類学的研究の2つに大きく分類、国際共同研究を通してこれらの課題に取り組んでいる。外国人を含む若手研究者の育成にも貢献している(研究代表者として、頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム、頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム、国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラムなど)。</p> <p>(A)に関して、2つのピロリ菌新規病原因子を発見・命名した実績を持つ(OipA、DupA)。ゲノム解析を駆使し、新規病原因子・抗菌薬耐性遺伝子変異の発見に取り組み、迅速に変異を検出するシステムの構築にも取り組んでいる。</p> <p>(B)に関して、ピロリ菌ゲノム解析にて、世界の諸民族の移動の歴史を解明、最近では日本人の起源についての研究にも取り組んでおり、沖縄には、旧石器時代や縄文時代の名残を残すピロリ菌が存在、前者は中央アジアから4万年ほど前に異動してきたことを証明した。国際共同研究では、低開発国を中心に、世界17か国に自ら出かけて内視鏡技術指導を行い、ピロリ菌疫学研究を進めている。最近では、地球規模保健課題解決推進のための研究事業(GACD: AMED)および地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム(SATREPS: AMED + JICA)の代表として、ブータン政府と共同で胃癌撲滅プロジェクトに取り組み、ブータンにおけるゲノム解析基盤、迅速検査キット製造の社会実装を目指している。</p>
------	---



ブータンで内視鏡検査を行う山岡

研究業績・アピールポイント	<p>1997年にペイラー医科大学(米国)に留学、研究代表者として大型NIH研究費を獲得し、2010年からは同消化器内科講座教授を兼任。Impact Factor (IF) 3270.917点、Scopus: h-index 67、国際英文誌380論文 (R4年6月末現在)。Nature、Science、Lancet、Lancet Infect Dis、Nature Rev Clin Oncol、Nature Rev Gastro Hepatol、Ann Intern Med、Clin Microbiol Rev.などIF50以上の雑誌に10論文発表(IF30以上の論文に32) (IF2021年度版)。世界のエキスパートを選定するExpertscape (https://expertscape.com/ex/helicobacter+infections)で、ヘリコバクター感染症研究エキスパートの世界第3位に山岡が入る(R4年6月末現在)。現在進行中の外部資金研究は上述のGACD、SATREPS以外に、研究代表者としてe-ASIA(AMED)、二国間交流事業、新学術領域研究(研究領域提案型)、基盤研究(B)があり、基盤研究(B)(途中基盤研究(A)あり)は7回連続で採択中。</p> <p>【講座ホームページ】 https://oitadepm.com/</p> <p>【業績リンク】 https://researchmap.jp/yoyamaoka (research map), https://research-er.jp/researchers/view/244636 (research-er.jp: 日本の研究.com) https://www.scopus.com/authid/detail.uri?authorId=55183784100 (Scopus)</p>
---------------	---